
夢の向こう側

月島ヒガサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の向こう側

【Nコード】

N6338G

【作者名】

月島ヒガサ

【あらすじ】

「夢の向こう側というものをご存知ですか？」私達の前に突如現れた謎の男。そこで告げられる私達の背負わされた宿命とは！？転校したての私とどこかおかしな面々とで繰り広げるまったり青春ファンタジーが幕を開ける！！

プロローグ

あなたは、夢の向こう側というものをご存知ですか？

それは、幻想をいだけ人がいる限り必ず存在するもう一つの世界。

私はその世界の住民の一人なのですが・・・

実は、こちらの世界、少々困ったことになってましてね。

あなた方の世界にこうして馳せ参じさせて頂きました。

大丈夫、あなた方に危害は加えないつもりですから・・・

はい、たぶん・・・。

では、物語を始めることにしましょうか。

第1話 夢の前

桜の花が咲き乱れ、全ての生物に喜びと希望を告げるそよ風が吹き渡る頃。

私達家族は電車で揺られ、この町に引越してきた。

数ヶ月前、私と母は父から会社をクビになったことを告げられた。

母は、はじめ驚いた顔をしていたが、父の神妙な顔を見ると顔を緩ませ

「仕方のない人ね。」

と父の頭をこずいて笑いかけていた。

こんな時にまで幸せそうにじゃれ合う二人を横目に、私は溜息をつく。私は、仕事に行かず公園でブランコをこいでいる父の姿を何週間も前からこっそりと観察していたので、

実を言くと、こんな日が来ることはずっと前から薄々と感じていた。

その後も、母は離婚を求めることもなく、父とこれからのことを話し合っているようだった。

引越しのことを話されたのはその一月後。
私が思っていた以上に家計は厳しかったらしく、今までのような生活ができなくなったそうだった。

そのため、父の実家である祖父の家へ新学期にあわせて引越すことになったという訳だ。

私の横から父のピリピリした空気が伝わってくる。

実は、これまで祖父の家を私が訪れることは一度もなかった。詳しく教えてもらったことはなかったが、祖父と父は仲が悪いらしい。

父も極限の生活の中ついに覚悟を決めたということか・・・。

到着を知らせるアナウンスが電車内に響く。窓の外を眺めると穏やかな海が広がっていた。

耳を澄ますと港から大きな汽笛が聞こえる。

私はきつとこの町で産まれたんだ。

その時、私はなんとなくそう感じた。

幼い頃の写真が一枚もない私は、自分の産まれた場所を知らない。今の父と母はとても優しくしてくれてはいるが、本当の父と母ではないことは分かっている。

ともあれ、暖かい春の日差しの中、私『鷗島ミナト』は父と母に連れられ、13歳にして始まる第2の人生を前向きに歩もうとしていた。

数日後、私は新しい中学に通い始めた。

第2話 夢の始まり

「お父さんの御仕事の都合により新しく転校してきた．．．」

なんとも有りがちな嘘の紹介が担任の先生から告げられた。

そりゃまあ、生活が厳しくて父の実家に一家三人で逃げ帰ってきたとは言えないわな。

それはともあれ、私はめでたく、この『2の3』の一員としてのスタートを迎えることとなった。

私の席はあらかじめ用意されていたようで、校庭寄りの1番窓側の後ろから2番目の席に案内された。

席に着くと、隣の女の子がニコツと笑いかけてきた。

うむ、なかなかのポジションではないか。

朝の会が終わり、先生が教室から出ていくと多くのクラスメートに囲まれることとなった。

まるで動物園のコアラにでもなった気分だね。

実を言うと、このようなことは初めてだったので少し気恥ずかしく、むず痒かった。

それでも、もちろん嬉しいものは嬉しくて、私はどんなにくだらない質問にも今回ばかりは、作り笑いをしながら一つずつ丁寧に答えた。

聞かれたことのほとんどは住んでいた地域のことや前の学校のことだったので、冬になると雪で街一面が真っ白になること、この学校とは違って前の学校は一学年に一つしかクラスがなかったことなどを話してやった。

みんな他の地域や学校に興味があるようで、目を輝かせながら

「わあー」とか

「へえー」とか言っている。

「はい、授業始めるぞ。」

そうこうしていると、先生が教室に入ってきた。

コアラとのふれあいタイムは一時中断みたいだね。

みんなが慌てて自分の席に戻って行く。

それからも新しいクラスメートは私に優しくしてくれた。

特に、隣の席の鳴瀬ツグミちゃんには教科書を見せてもらったり学校のことを教えてもらったりと親切にもらった。

おまけにもものごっつい可愛い娘で、優しいキラキラした目を見ているだけで、おもわずうつとりしてしまう。

この娘になら襲われてもいいかも。いや、むしろ襲っちゃう？

……って、もちろん冗談だよ。

今のところ私にはそんな要素は含まれてないはずだからー。

話しは飛んで給食時間。

ちようど私が苦手なニンジンと格闘している時、麗しのツグミちゃんが話し掛けてきた。

「ミナトちゃん、まだ学校の中よくわからないでしょ？昼休みに学校中を案内しようか？」

あまりにも目を輝かせて尋ねてくるもんだから、私は口にニンジンが入ったままだということも忘れてしまった。

「う、うん。それじゃ、お願いしようかな。」

「やったー！約束だよ。」

つぐみちゃんは、そう言つと席から立ち上がった。

「おかわり行ってくるね。」

私の頭をポンと撫でると、お椀を持ってスパゲッティの入った食管へとかけて行く。

ニンジンの味が口の中に広がっている。

あれ、ニンジンってこんなに美味しかったっけ？

私はようやくニンジンを読み込んだ。

第3話 夢の気配

という訳で私は今、ツグミちゃんのカビゲートによる校内探検を楽しんでいる。

「えーっと。理科室も保健室も行ったし、家庭科室は授業で行ったよね？」

私よりも数歩前を歩くツグミちゃんが振り返る。

「うん。行きましたとも。にしても広い学校なんだね。ちょっと疲れちゃったよ。」

私は息をきらして、ツグミちゃんのフワフワ揺れるきめ細やかな長い髪の毛を追いかける。

「ふふふつ。こちら辺の中学校の中では一番広いみたいだからね。他に行ってみたいところある？」

そう言ってまた笑いかけてくれる。

「そうだねー。図書室に行ってみたいな。めっちゃめっちゃでかいって聞いたし。」

「そっかー、忘れてた。図書室は別館になってるからまずは一階まで降りないとね。」

そう言うとツグミちゃんは、足早に來た道を引き返し始めた。

見かけによらず、すごい元気なんだよね。私はもうへロへロだよ。

図書室に着いた時、私の額には汗がうつすら滲んでいた。

息一つきらさないでツグミちゃんが片手を広げた。

「ここが図書室だよ。どう？でっかいでしょ？」

確かに、中学校の図書室にしては贅沢なくらいだ。

「中はもつとすごいんだよ。」

そう言う私の手を引っ張り図書室内へ少々手荒にエスコートしてくれた。

図書室内には所狭しと本棚が陳列されていて、真ん中の開かれた空間に机が並べられている。

「すごいねー！本だらけ。」

「でしょ！！ただ、利用者はあんまりいないんだけどね。」

確かに、周りを見回してみても片手で数えられる程しか生徒の姿は見られない。

私は近くの本棚に手を伸ばし、『カスピ海の恵』という本を手にした。

「あつ、いけない！」

突然ツグミちゃんが口を開いた。

「昼休みに先生のところ来るように言われてたんだった。」

時計を見つめるツグミちゃんにつられ、私も時計に目をやる。
時刻は1時15分。

休み時間が終わる15分前だ。

「まだ間に合うね。」

「うん、ちょっと行ってくるね。ミナトちゃんも一緒に来る？」

「私は大丈夫だよ。ここで本でも読んでるから。」

「そっか……。じゃあ、行ってきましたーす。」

そう言つてツグミちゃんは、図書室を後にした。

私は、取り合えずさつき手にした本を持って近くの席につく。

とは言え、読書することのほとんどない私が図書室で楽しめるはずもなく、5分と経たないうちに暇になってしまった。

ポケットをまさぐるとシャープペンが出てきたので、束ねて置かれていた『図書室便り』から一枚くすねて裏に落書きをすることにした。

しばらく落書きをしていると、ふと視線を感じた。

「ん？」

頭を上げると、そこには一人の女の子が座っていた。

何も言わずにジーツと私を見つめる瞳には、好意とも好奇とも疑いともとれない無の空間が浮かび上がっている。

この娘、普通じゃない。

私は一瞬にして、この女の子に流れる異様な雰囲気を感じ取った。

「あなた、どこの星から来たの？」

へえ？星！？

急にとんでもないことを言い出した。

いやいや、これはきつと見かけない顔を見て、

「どこの学校から来たの？」

って聞きたかったんだよね？

そういう意味なんだよね？

私がグルグルと思考回路を回していると、さらに口が開かれた。

「あなたは、私と同じ匂いがする。」

「まあ、給食で同じ物食べたはずだし・・・って、違うか。」

テヘヘーと空気を和ませようとした私の努力も虚しく、頬をピクリとも緩めることなく私を凝視している。

「そう、あなたはまだ気付いてないんだね。」

抑揚のない淡々とした声でそう話すと、椅子から立ち上がった。どこか残念そうに見えるのは、私の気のせいだろうか。

「そうだ。」

何かを思い付いたように無表情の顔を少し上へと傾ける。

「たまに、物がどこに行ったのかわかんなくなる事ってあるじゃない？」

「じゃない？って言われても・・・」

居間でリモコンどこ行ったかわからなくなるとか？

私が首を傾げてヘルプのサインを送ると、さらに付け足してくれた。

「そう、後・・・シャープペンとか。」

慌てシャープペンを置いたところを確認してみたが、やっぱりそこには何もなかった。

「どっついうこと？」

私が再び彼女に目をやると、一点の淀みもない瞳が待ち構えていた。

「あれってね、宇宙人が研究用に持っていったからなんだよ。」

私の頭の中では、ハテナマーチで行進が繰り広げられていたが、頭トロトロになっている場合ではないのだ。
シャープペンを探さないと……

答えは意外とすぐに見つかった。

彼女の透き通った瞳から胸ポケットへと視線を移すと、私のシャープペンの頭が覗いていた。

「あつ……。」

私が気付いたことを確認すると、不思議少女は椅子をいれ図書室を後にしようとした。

「ちょ……待って！」

私の言葉に少女は振り返り、表情を変える事なく口を開く。

「大丈夫、そのうち返ってくるから。」

ただただ呆然とする私を残して、宇宙少女は私のシャープペンと共に図書室を後にした。

ツグミちゃんが帰って来たのは、それから少し経ってからだった。

「おまたせー。お絵描きしてたんだ。」

ツグミちゃんが私の手元のプリントを覗き込む。

「なにこれ？シーラカンス？」

「違うよ、イルカだよ！」

と悩んでいるツグミちゃんにツツコミを入れるとツグミちゃんは、さらに眉をひそめた。

「イルカ．．．？」

この時ばかりは、ハテナ顔のツグミちゃんが少し憎らしく見えた。

「じゃあ、これは？」

「そっちはイソ．．．」

ギンチャク！と返そうとしたところでツグミちゃんの指す指が違ふところを向いていることに気付いた。

ツグミちゃんの指の先には、まるでワープロでも打ったような流麗ながらもどこか人間味のない文字が並んでいた。

『今日の放課後、赤灯台にて待つ。

鷺森シズク』

私の意識外では、なにやら賑やかなクラシックをバックミュージックに、昼休みの終わりと掃除時間の始まりを同時に告げる放送が流れ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6338g/>

夢の向こう側

2010年10月8日21時45分発行